



トップページ

Web サイト

「宮澤賢治の詩の世界」 (mental sketches hyperlinked)

<http://homepage1.nifty.com/ihatov/>

賢治の詩の草稿逐次形を通覧したり、歌曲の演奏を聴いたり朗読を聴いたり、推敲のプロセスを動画で見たり、全国各地の詩碑を巡ったり…。多彩な賢治の世界を、マルチメディア的に体験できるインターネットホームページです。

一、「校本全集」の校異記号

あの「校本宮澤賢治全集」が刊行されたとき私は中学生で、その重厚な各巻を買って手もとに置くことはできませんでしたが、何かの折りにふと中をのぞくと、そこには作者の推敲のプロセスを示すための、何とも不思議な記号が並んでいたことをおぼえています。しかしこの時は、それ以上深くそれについて考えずに通りすぎました。

その後私は、宮澤賢治の世界とは関係のない生活をしたり仕事をしたり、それでも時々はまだ彼の作品を読み返して、はげしく懐かしい気持ちにとらわれたりもしていましたが、一九九五年に「新校本宮澤賢治全集」の刊行が開始されると、今度は決心して全巻を買いそろえることにしました。

届けられた巻を開くと、そこにはかすかに見おぼえのある不思議な記号が並んでいました。そして今回は腰を落着けて記号の説明を読むことで、それらが奥義的に開示しようとしている、底知れない賢治のテキストの世界を垣間見るようになったのです。

まるで永久運動を続けているような宮澤賢治のテキストは、まさに驚嘆すべきものでしたが、またそれを精密かつ徹底的に解読させてみせている「賢治研究」という営みの凄さも、

私はこの時ほんとうに知りました。

今も私が宮澤賢治に関するホームページを作っている背景には、新校本全集と出会ったこの時の気持ちがあると思います。賢治と賢治研究への、驚きと憧れです。

二、ホームページを作るまで

その後、インターネットが広汎に普及していくに伴って、一九九六年に加倉井厚夫さんの「賢治の事務所」(<http://www.bekkoame.ne.jp/kakurai/>)一九九八年には渡辺宏さんの「森羅情報サービス」(<http://www.keiji.ne.jp/wjny/>)などが開設され、賢治に関する多彩な情報を発信したり、独自の視点からアプローチするサイトが、数多く見られるようになりました。私もそれらに親しみ、存分に楽しませていただきましたが、それは懐かしい賢治の姿を見せてくれるにとどまらず、印刷された本とは異なった新しい角度から、彼の世界を体験させてくれるものだったのです。

これらに刺激を受けた私も、インターネットというメディアによって、たとえば賢治のテキストの永久運動をリアルに表現できないか、などということの時々考えてみるようになりしました。

さて一九九九年に私は、生まれてはじめて

花巻を訪ねることができました。子どもの頃から親しんでいた賢治作品の故郷を初めて踏みしめた感激について、ここで思いを述べるための紙数はありませんが、結局この時の体験が私にとって、賢治に関するホームページを作ろうという最終的なきっかけになったと思います。花巻市内を自転車であらって写した二五枚の詩碑の写真が、「石碑の部屋」の原型になりましたし、旅行を終えて家に帰ると、『春と修羅第二集』関連草稿一覧」という表をハイパーテキストで作りはじめました。

三、賢治テキストの「星図」を作る

インターネット上にある文書は、一般にハイパーテキスト」と呼ばれる形式になっています。ふつうのテキストに比べてこれは何が「ハイパー」なのかと言つと、この形の文書においては、中の情報が相互に参照しあつようなテキスト間の連結があらかじめ埋め込まれているところが、その最大の特徴です。こ

の連結は「ハイパーリンク」と呼ばれますが、世界のインターネット上にあるすべての文書データは、このハイパーリンクによって蜘蛛の巣のおたがいに複雑に関連づけられているのです。そのおかげで、人はインターネット上で一つの情報を見たら、それと関係ある情報を手軽に取り出して、有機的に把握しやすくなっているわけです。

賢治の草稿群の織りなす複雑な世界を、何とかして直観的に見渡せるようにできないものかと考えた時、このようなハイパーリンクという仕掛けが、草稿と草稿との間の関連性を表現するのに使えるのではないかと、私には思われました。賢治のテキストは、「推敲」「改稿」「改作」など様々な形で転生を重ねていきますが、そのような関係にある各々の草稿を、これで相互に結んでおくのです。

たとえば、夜空に散らばる無数の星は、ばらばらに見たままではその全体的布置を把握するのは困難ですが、星と星との間を仮想上の線で結び、「星座」として認識するようにす

れば、人間にとってはより直観的に把握しやすくなります。これと同じように、インターネット空間に浮かべた膨大な賢治の草稿群をハイパーリンクでつないでみようというわけです。そのためにかかる手間とはもかく、技術的にはこれは単純なことです。

さて、そのようにして星と星とを結ぶ線を描けたとして、次に必要になるのは、全天の星座を正しく位置づけてその全体像を眺められるようにした、「星図」に相当するものです。

賢治が死ぬまで書きつづけた多種多様な草稿群を、どういう規則に従って並べれば意味のある配置になるのか、こちらの方はなかなか難しい問題ですが、私としては「時間」という軸にこだわって、草稿を定位してみようと考えました。宮沢賢治という人は、たとえば『春と修羅』の「序」に見るように、この世の現象が時間軸に沿って展開していく有様に対して特別な愛着をいだいていたようです。また実際に彼のテキストそのものも、時間のなかで多彩な転化転生を経ていく性質を



『春と修羅第二集』
関連草稿一覧

帯びているからです。

具体的には、作者が草稿に付記した日付の時間を一つの軸とし、他方、個々の草稿が実際に書かれたであろう時間をも一つの軸にして、その二つがなす二次元平面の上に、全ての草稿を配置してみようと考えました。

前者の日付は、作者がその作品の着想を初めてスケッチした時を表していると考えられており、校本全集でも作品配列の基準になっています。一方、後者については、作者は個々の草稿にそれを書いた日付などは一切記入していないので、具体的な判定は困難です。ただこれまでの賢治研究のおかげで、その草稿が記されている用紙の種類によって、おおまかな時系列を推測することは可能になっていますから、ここでは用紙分類による配列を、二つめの軸とすることにしました。

このようにして、縦軸に「スケッチ日付」を、横軸に五段階の用紙分類を年代順に並べて、『春と修羅第一集』に関係のある五三二の草稿類を配置したのが、右頁の『春と修羅第一集』「関連草稿一覧」という表です。

左端の白い背景の部分が詩稿用紙への転記以前の草稿（ノート紙、五線紙、初期の発表原稿等）、桃色の部分が赤野詩稿用紙に書かれた草稿、黄色の部分が黄野詩稿用紙に書かれた草稿、灰色の部分がその他の用紙に書かれた草稿、

右端の白色の部分が定稿用紙に書かれた草稿という配置になっています。また、各草稿名をクリックすると、別画面でそのテキストが表示されるようになっていきます。前述のようにこの表には二種類の時間が流れており、作者が新たな着想を手帳にメモしていった時間は上から下へ、その草稿に手を入れ推敲した時間は左から右へ流れるという構造です。

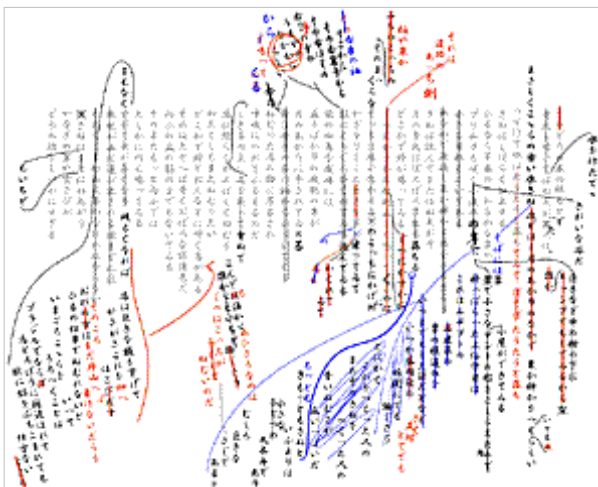
花巻の旅行から帰った私は、試行錯誤しつつこの一覧表を作り、夜なべ仕事で各逐次形テキストを入力して（これが一番たいへん）、やっと完成した一九九九年一〇月に、ホームページ「宮澤賢治の詩の世界（mental sketches hyperlinked）」のコンテンツとして公開しました。かねてから校本全集の校異記号に魅せられていた私としては、その感動を自分なりに表現してみたのだとも言えます。

四、その他の時間軸

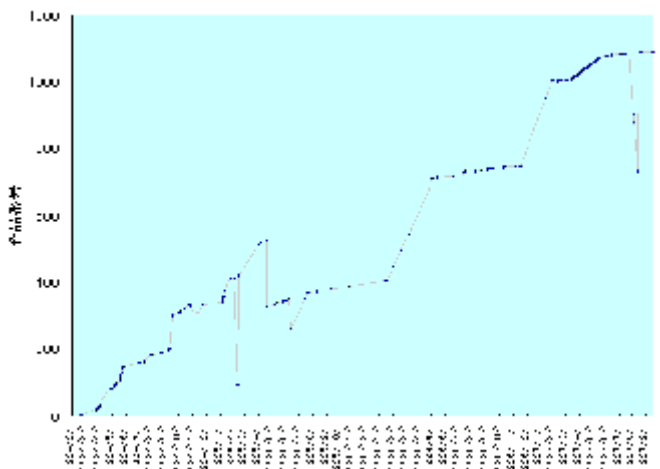
当ホームページには同様の一覧表として、『春と修羅第一集』「関連草稿一覧」、『春と修羅第三集』「関連草稿一覧」というものも掲載しています。いずれも前述のように、草稿を二つの時間軸のもとに位置づけてみたものですが、サイト内にはこれらの他に、「時間

という次元に対してまた別のアプローチを試みたコンテンツも、いくつかあります。

たとえば、「動画で見る賢治の推敲」というコーナーでは、一つの草稿を取り上げて、賢治が行った推敲過程を左図のような画面上で再現しています。これはフラッシュムービーという動画になっているのですが、パソコンで表示すると推敲の時間経過に沿って、順に字句や取り消し線などが現れるようになっていきます。この動画は二〇〇二年の宮沢賢治学会夏季特設セミナーにおいて、杉浦静先生の講演でも使用していただきました。



「動画で見る賢治の推敲」



「作品番号増加曲線」

また、右図は「グラフで見る賢治の詩作」というコーナーの中の二つのグラフなのですがこれは口語詩に付けられている「スケッチ日付」と「作品番号」の関係をプロットしたものです。基本的にこの二つの変数は平行して動くのですが、「覧のように一部で不規則な挙動を見せるところがあり、その解釈についてはさまざま議論があります。

さらに、作者の死後のさまざまな校訂によって、賢治の「作品」の印刷形がどのように変化していったかということも、テキストの

時間的変遷という意味では、興味深いところ
です。ホームページにおいては、これまでに
出版された九種類の宮沢賢治全集の推移をた
どるコーナーも作りかけていますが、これは
まだ下中中です。

『春と修羅』の「序」に、「巨大に明るいつ
間の集積のなかでノ正しくうつされた筈のこ
れらのことばがノわづかその一点にも均しい
明暗のうちにノ…ノすではやくもその組立
や質を变じ…」とあるように、賢治が書きと
めた「ことば」は、彼の生前も死後も、せわ
しく明滅しながら転生していきます。賢治は
これを、「心象や時間それ自身の性質」と考え
ましたが、何とかこの性質を具体的に表現し
て、彼の感覚に肉薄できないかと思えます。

五、マルチメディア人間・賢治

やや堅苦しい話が続いてしまいました、が、
実際のホームページには、もっと気楽なコン
テンツもたくさんあります。

「歌曲の部屋」と題したコーナーでは、賢
治が作詞あるいは作曲した歌曲を、さまざま
な編曲で聴くことができます。パソコンで音
楽を演奏するためのMIDIという規格がある
のですが、これを使ってオーケストラや室内
楽にアレンジした響きを楽しめます。

また「石碑の部屋」というコーナーでは、
全国の各地に建てられている賢治の詩碑や歌
碑を、写真で見ることが出来ます。現在ここ
では、北海道から九州まで私が旅して写して
きた賢治関連の石碑類九七個が見られます。

サイト内にはこの他に、「五輪峠」を実験的
な朗読で聴けるコーナー、賢治の青春時代を
歌碑でたどるコーナー、Palmという携帯情報
端末で全詩集を読むためのデータ、月×日
の賢治が何をしていたのかを調べるコーナー
など、いろいろな趣向があります。

詩や童話や肥料設計書を書き、浮世絵を集
め花壇を設計し、歌を唄いセロやオルガンを
弾き、レコードに合わせ踊りエスプラントを
しゃべり、自作の劇を演出して「気圏オペラ
の役者」と名乗った宮沢賢治は、まさに稀代
のマルチメディア人間であったと言えるでし
ょう。七〇年後のホームページ作者としては、
昨今のITが可能にしてくれる多様なメディア
を最大限活用して、彼の奥深い世界に少し
でも分け入ってみたいと思っています。



「石碑の部屋」より